近世初頭の京都における町家土蔵の配置 THE ARRANGEMENT OF THE TOWNHOUSE' WAREHOUSES OF KYOTO IN EARLY MODERN PERIOD

丸山 俊明*
Toshiaki MARUYAMA

The aim of this paper is to clarify the transition of townhouse' warehouses of the early modern period in Kyoto. After the division of public area, warehouses were built in the backyard of townhouses at the end of 16th century. After that, another type of warehouses appeared in the street frontage, these were full of the expression wealth. However, these were extinguished by the architectural control of Kyoto- shoshidai in the middle of 17th century. As the result of that, warehouses have been placed in the backyard of townhouses.

Keywords : Kyoto, town-house, townscape, warehouse, Setafuzokuzubyobu

京都、町家、町並景観、土蔵、瀬田風俗図屏風

第1節 はじめに

中世に土倉（質屋）が質草を入れたという土蔵は、絵画史料にみあたらない。しかし、近世初頭に町家から突き出す内蔵（突出内蔵）や表蔵（通りに面して立つ土蔵）、裏地（敷地の奥）に立つ庭蔵（土蔵）が現れ、特に庭蔵は防火帯と評価されるほど増加する^{注1)}。もともと京都所司代（以下、所司代）-京都町奉行所（以下、町奉行所）体制がそれを命じた形跡はなく、17世紀中頃以降の表蔵規制が宝永大火（1708）に徹底されて表蔵や突出内蔵が消えた可能性が高い。筆者は既にこの点を指摘したが^{注2)}、庭蔵自体は建築規制を遡る16世紀末期から、突出内蔵と同時期から観察される。本論は京都の町家の裏地に、庭蔵が現れた経緯を検討する。

第2節 絵画史料に土蔵を観察する先行研究

上記課題に関わる先行研究の中に、高屋麻里子氏の論考^{注3)}がある。高屋氏は元和期（1615～23）初頭の林原美術館本『洛中洛外図』屏風から、二階建ての町家から突き出す三階建ての内蔵と、主屋から離れた三階蔵の存在を取り上げられ^{注4)}、特に後者の位置取りを「三階蔵は通りに面した町家の奥に接しているか、敷地奥に単独で描かれている」、それは「通りに面した主屋と奥座敷、さらに敷地奥の土蔵という一定の建物構成」が確定し始めたときに「眺望という新しいステータス」^{注5)}を求めた町人が、三階建の内蔵を町家主屋から分離独立させた結果とされた。このように裏地の三階蔵を富裕表現と位置付ける高屋氏の論考から、さらに以下の記述を抽出する。

- ・ 林原本の三階蔵と主屋から表出する土蔵の表現からは、林原本の景観年代が、屋敷構成の成立に伴い土蔵が主屋から分離独立した時期に該当する可能性を指摘できる。

図1 林原美術館本『洛中洛外図』屏風（部分）

- ・ 土蔵につながる三階蔵は建物内部から発展したと考えられ、土蔵の分離独立と経済的繁栄や権力の所在を示す象徴性の強い形態の完成が都市の区画された敷地内での建物構成を決定する強い要因となったと考えられる。三階蔵の出現は、近世京都における都市空間の変容を促したといえよう。

第二項の冒頭「土蔵」は三階蔵より「つながる」とあり、二階建ての庭蔵と判断される。高屋氏はその根本を独立の三階蔵とされ、さらにその根本を三階建の内蔵、原点を主屋内部の内蔵とされる。

また三階蔵が分離独立する環境を「通りに面した主屋と奥座敷、さらに敷地奥の土蔵という一定の建物構成」とされ、「土蔵の分離独立と経済的繁栄や権力の所在を示す象徴性の強い形態の完成が都市の区画された敷地内の建物構成を決定する強い要因となった」つまり三階蔵が17世紀前半に「一定の建物構成」を増加させたと言われる。しかし「一定の建物構成」を可能にする裏地占有には土本俊和氏らが織豊政権の政策を指摘されており、三階蔵に関わる建築規制には日向進氏^{注6)}や筆者の指摘がある^{注7)}。そして庭蔵の出現を検討する本論は、さらに高屋氏の論考に以下の疑問を呈する事から始めたい。

* 住環境文化研究所 学博

Culture and Life Environment Laboratory, Ph. D.

- ・ 裏地の塗籠本瓦葺の建物は林原本以前、突出内蔵と同時期に出現する(後述)。建築用地となる裏地の占有経緯も考慮せずに、元和期初頭の庭蔵の分離独立を規定する事は難しい。
- ・ 林原本の裏地の塗籠本瓦葺は接地部分が描かれず階数不明だが、全て三階建とみても、眺望機能は堅格子越しに座敷らしい最上階を持つ1棟にだけ観察され(図1右)、面格子付小開口を持つ多くに眺望機能は観察できない(図1中)。高屋氏が現存例とされた天和年間(1681-83)の裏地の三階蔵も最上階に「眺望という新しいステータス」は見当たらず(写真1)、防犯を意識した通気・採光口だけがある。これをみても裏地に庭蔵が出現した要因を富裕表現や眺望機能に限定する事は難しい。
- ・ 三階蔵が分離独立した環境が「通りに面した主屋と奥座敷、さらに敷地奥の土蔵という一定の建物構成」なら、林原本にも散在する表蔵が問題になる。富裕表現にはこの表通りに屹立する表蔵(図1左)や突出内蔵こそ適当である事は、後に倭約基調の徳川政権の表蔵規制の対象となる事にも裏付けられる(はじめに)。裏地の位置取りを富裕表現と結びつける事は難しい。

以上を指摘した上で、絵画史料に町なみの変容を観察する。なお高屋氏は「土蔵につながる三階蔵」として三階蔵と土蔵を分け、後者を二階建てと規定されるようであるが、裏地の位置取りに富裕表現をみない本論は、二階・三階の区別なく裏地の土蔵を庭蔵と記す。

写真1 西川家裏地の三階蔵(滋賀県近江八幡市)

第3節 絵画史料にみる庭蔵・突出内蔵・表蔵の出現と時代背景

天正期(1573-91)の京都を描く福岡市博物館蔵本(伝狩野孝信筆『洛中洛外図』屏風)では、石置板葺の町なみに内蔵が突き出している(図2)。また文禄3年(1594)破却の聚楽第を描く『聚楽第図』屏風では、本二階建ての町家の奥に、塗籠本瓦葺で漆喰塗の庭蔵らしい建物が並んでいる(図3)。内蔵と庭蔵の出現は共に近世初頭に観察され、時間差はみあたらない。そして発掘調査でも、この16世紀末期の京都に塗籠本瓦葺の土蔵の存在が推定されている^{注8)}。

図2 福岡市博物館本(部分)

図3 『聚楽第図』屏風(部分)

図4 『瀬田風俗図』屏風(左側部分)

一方、これらを遡る中世の絵画史料には、土蔵建築(庭蔵・突出内蔵・表蔵)が見当たらない。僅かに鎌倉時代末期の『春日権現験記絵』に屋根まで塗籠漆喰塗の建物があり、内蔵の外皮建物が除かれた姿とみなされている。そうすると中世には内包された内蔵が、近世初頭に突き出した内蔵、或いは庭蔵として出現した事になる。

そこで時代背景を概観すると、鎌倉時代末期の京都は鎌倉幕府が置いた六波羅探題が弱体化し、治安が悪化していた。続く南北朝～室町時代も、14世紀後半の一時的安定を除けば京都周辺では争乱が絶えず、15世紀前半からは土民の徳政士一揆が土蔵建築を持つ土倉や酒屋を繰り返し襲撃したとされる。応仁元年(1467)からは大乱が10年続き、戦国時代に突入する。この時期に土蔵建築が町なみにみあたらないのに、織豊政権が治安を回復した近世には土蔵建築が表出する。この点を重視すると、用心警戒のため土蔵建築を町なみに目立たせなかった中世の考え方が、近世に後退した可能性がある。

また江戸時代に入る慶長期(1596~1614)後半の文化庁本や富山勝興寺本(図5)では、庭蔵らしい建物が散在するが(図2)、突出内蔵は富山勝興寺本に僅少で表蔵はみえない。表通り沿いの用地確保が進まない中での表出もあったろうが、既に裏地の庭蔵が多い傾向をみれば、まだ表を警戒する中世的気風があった可能性がある。

その後、元和期(1615~23)初頭の林原美術館本や寛永期(1624~43)前半の京国博本『祇園祭礼図』屏風にみる表通りでの突出内蔵や表蔵(図1左)の増加は、徳川政権の天下統一による社会的安定と都市活性化の中で資産を蓄積した町人の富裕表現と推測され、結果的に町並景観の多層多様化の一翼を担った、それゆえにやがて倭約基調の徳川政権から表蔵規制を受けて消滅したと考えられる。

以上、絵画史料の観察は京都の庭蔵の出現を16世紀末期とする。

図5 『瀬田風俗図』屏風(右側部分)

第4節 裏地の占有経緯

第4節第1項 絵画史料に関わる先行研究の指摘

庭蔵の出現を考える時、治安以外に建築用地の裏地占有も問題になる。大永5～天文5年(1525～35)頃の歴博甲本『洛中洛外図』屏風では、町家が囲む街区内側に塀等の境界装置は少ない。日向進氏も「大部分の町家にはトオリの反対側に面する部分を区画するような特別の装置はみられない」^{注9)}と観察され、少数の井戸と便所を共同利用とされる。個々の町家に裏地占有が進まない中で庭蔵の建築用地はみあたらず、土蔵建築は町家内部にしか推測できない。

もっとも当時の街区内側には、共同利用をみる文献史学の立場と否定する建築史学の立場があるが、これらと都市考古学の成果を併せ検討された土本氏は、街区内側の僅かな境界装置に街区周囲の四辺に位置する四町それぞれの共同利用を指摘された^{注10)}。その上で、当時の京都には敷地境界を持つ建物と持たない建物群の二種が共存する状況があり、特に敷地境界を持たない建物群が井戸や便所などを共有した、そして街区内側には「日常生活に不可欠な諸施設の共益関係に支えられた」^{注11)}結合があったとされた。「敷地境界」を「持たない建物群」の共同利用が大勢である中に「敷地境界を持つ建物」の存在も指摘されたのである。この「敷地境界を持つ建物」には、日向氏も以下のように指摘されている^{注12)}。

オク側の室に面する部分を取り囲む塀がつくられている。塀に窓があげられているものもある。オクのザシキに面して小さな庭(坪庭)がつくられ、オクザシキを静寂な一境に包み…

町家主屋の裏地つまり街区内側の「塀」で囲まれた空間は、町家背面の「オクザシキ」に面した「庭」とされる。当時の京都の荒廃は連歌師宗長が「京を見渡し侍れば、上下の家、むかしの十が一も

なし」(『宗長日記』)と伝えるが、一方で奈良屋宋珠(村田珠光の後継者)の草庵茶室には「下京茶湯とて、このごろ数奇などいいて四畳半敷、六畳敷をのの興行、宋珠さし入、門に大なる松あり、杉あり、垣のうち清く」と記し、鷲尾隆康も「山居の躰、もつとも感有り、誠に市中の隠」(『二水記』)と専用の庭園を示唆する。僅かな裏地占有に庭を確保する目的が窺えるのであり、この事から当時の裏地に庭蔵がみあたらないのは、不安定な時代における用心警戒のほか、庭や背景となる景観が重視されていた可能性も窺える。

このほか土本・須藤優子両氏は、共同利用が不要となるには専用井戸と便所の設置が必要とされ、その負担が裏地占有の障害になった可能性を指摘されている^{注13)}。そうすると当時の京都は、多くの町人が裏地つまり街区内側を町単位で共同利用する中で、専用設備を用意できた富裕町人だけが、庭確保を目的に裏地占有を散発的に行っていた状況が考えられる。そして天文年間(1532～55)後半の上杉本『洛中洛外図』屏風や天正年間(1573～91)中頃の「元秀」印『洛中洛外図』扇面でも、それに変化はないように観察される。

第4節第2項 『瀬田風俗図』屏風にみる裏地占有

散発的な裏地占有の実態を『瀬田風俗図』屏風^{注14)}にみたい(図4、図5)。京都ではないが、東海道起点の京都三条大橋から10数km、琵琶湖が瀬田川に流れ込む近江国瀬田は東海道筋の宿場町で、宇治川沿いに大和街道にも繋がる交通の要衝であった。畿内幕政を統括する所司代・町奉行所体制は、東国と西国を分けて瀬田川に架かる唐橋を「御公儀様御普請所」とし、膳所藩の管理を監督する形で瀬田支配に関与した^{注15)}。このように京都と関わり深い瀬田を描く『瀬田風俗図』屏風は、衣装風俗を観察する美術史関係から寛永期(1624-43)の景観年代が指摘されている^{注16)}。建築史的にも、京都では

17 世紀後半以降に減少する突出内蔵や望楼が描かれる事^{注17)}、後に町奉行所が「不行儀之躰」と規制する「みせ先=腰掛け」^{注18)}が大名行列の見物人の中にある事など、同様の景観年代が窺える。

描写内容を見ると、行列が行く東海道筋の町家には板葺の厨子二階が多く、その中に突出内蔵があり(図4上)、土蔵建築を目立たせない中世的な考え方はみあたらない。また町家列の裏地を詳細に描く点に本屏風の特徴がり、瀬田川に面するためと考えられるが、開幕から30年過ぎた当時、まだ裏地に共同利用らしい井戸(図5左端)や便所らしい建物(図5中央)があって、中世末期の歴博甲本『洛中洛外図』屏風のそれらに似た姿をみせている点が注目される。

その一方で、裏地に塀を廻す町家も二棟ある。まず突上戸付の望楼を持つ町家は(図5左寄)、座敷の付書院から眺める空間が裏庭と思われる。二階座敷を持つ本二階建ての町家も裏庭を持つが(図5右寄)、隣の草葺建物(図5右端)は突上窓・下地窓・扁額・奥に腰掛待合を備える草庵茶室らしく、周囲の露地空間を本二階建ての裏庭と分ける屋敷構成が窺える。そしてこれら裏庭を確保する町家だけが眺望の効く二階部分を備え、富裕町人の住まいを示している。

つまり近世初頭の瀬田は、富裕町人の散発的な裏地占有がある点で中世末期の京都と共通するが、相違点もみいだせる。まず本二階建ての町家の左隣の平屋は、内部に井戸を持つ(図5中央、井戸の奥)。別の平屋でも、背面の小さな下屋が小ぶりの下地窓を開け、歴博甲本の便所と似ている(図4中央)。つまり平屋に住む町人でも専用設備を備える状況が窺えるが、彼らは裏地占有を果たしていない。瀬田川沿いは水運と関連して占有できないとの見方もあろうが、荷揚場は乗降用の階段がある場所に特定され(舟がある辺り)、ほかの裏地占有と共同利用が混在する場所に水運との関連は窺えない。

また、街道沿いに突出内蔵があるのに、京都では同時期に出現した庭蔵は裏地に見当たらない。瀬田川越しの景観を楽しむ裏庭である事に要因が窺えるが、彼ら二階建てでも可能な富裕町人だけが裏庭を確保できた事を重視すると、裏地占有が面的区画に進まない状況は、専用設備の確保よりも何らかの経済的負担が障害になっていた事が推測される。現時点でその経済的負担の実態を示す史料は得られないが、やはり裏地占有が散発的であった中世末期の京都では、裏地つまり街区内部に伝統的領主の地子徴収権が存在していた^{注19)}。それが治安や専用設備の問題以上に、裏地占有の障害になっていた可能性が生まれる。そうすると京都の裏地占有が進んで面的区画となり、さらに庭蔵が出現するためには、近世統一政権による伝統的領主の地子徴収権の否定と、街区内部の共同利用を消滅させる都市政策が必要と考えられるので、次節で検討する。

第5節 天正地割と短冊形敷地の形成

第5節第1項 先行研究が指摘する短冊形敷地の形成経緯

散発的な裏地占有が面的な裏地区画に至ると、短冊形敷地が広がる都市になる。この短冊形敷地の形成経緯を、土本氏や早見洋平氏は「建物先行型」と説明されている。例えば早見氏は、上京の小川通沿いを取り上げて、まず面路部分で小屋がけ→やがて平入町家となって増殖→その建物の両端が背面町境へ伸張して天正15年(1586)迄に隣地境界線が形成、このような経緯を復原して「建物

先行型」と説明された。その上で以下の内容を記されている^{注20)}。

…一体的かつ共同的なウラ地を不要とするためには、個々の家が井戸や便所といった設備を準備し、完結していく必要がある。そのとき家屋の増大分はウラ地に向って振り向けられるほかない。一体的かつ共同的に利用されていたウラ地が解体されるに伴い、個々の家々の背後の土地の重要性の認識が高まり、そこに向う増殖が本格化するとき、家々が個々に用益できる範囲を物理的に明示しておく意味で、居住する町人自らが何らかの境界装置を設けたと考えられる…

専用井戸・便所を設けて建物が大きくなり、裏地占有が始まる事で重要性が認識され、短冊形敷地が並ぶ面的区画に至るとされるが、専用施設の確保だけでは裏地占有が進まない状況が『瀬田風俗図』に観察された(第4節第2項)。それよりもここでは、土本氏が元亀4年(1573)の上京焼討後の上京一帯に織田政権による直轄化と伝統的領主権及び地子徴収権の否定ならびに豊臣政権下の天正13年(1585)に上京の税が地積対象の地子負担から戸別徴収の棟別賦課に変わっていた事を説明された点が重要と思われる^{注21)}。上京の裏地は占有に伴う経済的負担が消滅していた事が明らかになるため、さらに豊臣政権が天正17年(1589)迄に「洛中検地」を進めて天正18年(1590)に天正地割を行った事の影響を重ねて推測したい。

一町四方の伝統的な街区内部に新南北通(突抜)を通したとき、新南北通沿いは新両側町の用地となる。従来の両側町には、共同利用地が広がっていた裏地に新両側町の裏地が現れた事になる。そこで裏地境に何らかの境界線を引くと、裏地占有の奥行限界になる。直ぐには共同利用が消えなかったとしても、裏地占有に伴う経済的負担が消えた中、やがて個々の町家は境界線に向けて同時並列的に裏地占有を進めたのではないか。その結果、間口長さと同幅の敷地境界線を持つ短冊形敷地を生んで、共同利用の街区内部を、個々の所有権が機能する裏地の面的区画に変えていったと考えられる。

この裏地占有は、中世末期の裏地占有が専用設備の確保と経済的負担という障害を経済力でクリアした富裕町人の散発的な裏庭確保だったのとは異なる。近世支配者が義務付けた棟別賦課を担う町人が、明確な利用目的を持たないまま裏地を得た可能性が高い。そのためどのような利用も、例えばゴミ捨て場(後述)とする場合や、治安安定を背景に庭蔵の建築用地とする事もあったと考えられる。

第5節第2項 短冊形敷地形成に関わる発掘調査の報告と批判

内田好昭氏は京都市中京区の東洞院通と高倉通の間、天正地割で間之町通が通された辺り(南北は竹屋町～夷川通の間)の西側の竹間小学校跡地(中京区)を発掘調査して「竹間事例」として報告された^{注22)}。ここでは17世紀初頭～中頃の地層から13の短冊形敷地を分かつ掘立痕列(隣地境界)が発見されたが、内田氏は面路部分に町家主屋を示す礎石や掘立痕がないとして、町家に先だつ短冊形敷地の形成を指摘された。これに対して「建物先行型」を主張する土本氏は、土台立の建物では礎石の痕跡が残らないとして内田氏を批判され、これを受けて内田氏も自説を撤回された^{注23)}。

この竹間事例で注目されるのは、13の短冊形敷地の裏地全てにゴミ穴は多数検出される一方、土蔵等の建物痕等はなく、井戸痕は表通近くに2箇所、裏地側に1箇所のみ、ほかの10箇所には検出さ

れない点である（便所痕には報告がない）。このうち裏地の多数のごみ穴は、明確な利用目的がないまま裏地を得た結果とみなせるが、専用井戸が少ない点は、敷地占有の前提条件を満たしていない。どのように上水を確保したかが問題となるが、町境では背割溝が発掘されている。土本氏はこの背割溝に、隣地境界線をなす杭列に先立つ設置を指摘される^{注24)}。また福井県一乗谷の朝倉氏遺跡に「都市の生活用水として、河川から取った水を溝のなかで流していく手法がまずあって、その後に井戸が個々に掘られていった」^{注25)}とされている。そして発掘調査は、17世紀後半～18世紀初頭以降に背割溝が污水溝化する事を報告するが、ちょうどその頃に井戸痕の検出も増加する。これらを勘案すると、発掘された背割溝は溝掘りの両側に杭と板を並べた簡単な構造であるが、実は速成の上水供給装置の可能性が高く、そのため井戸痕も少ないと考えられる。そして内田氏らも、この背割溝を「公的な権力」が引いたとされている。

もっとも内田氏は、発掘地層を17世紀初頭～中頃つまり江戸時代に入るとされる。そうすると辺りの集住は天正18年（1590）の天正地割に遅れる事になるが、伊藤穀氏が大阪船場の町境の「背割水路」を豊臣政権の都市開発と絡めて説明されたように^{注26)}、京都でも広く上水供給施設の背割溝を速成する機会は、伝統的な街区内部の共同利用の消滅を目的にした豊臣政権の京都改造すなわち天正地割にこそ窺える。そのとき背割溝が町境の境界線となって裏地占有の限界を示し、共同利用地の消滅と短冊形敷地の形成を促した可能性もある。ただし上京に遅れて天正19年（1591）に洛中地子赦免を受けて棟別賦課へ転換された下京や聚楽町、禁裏六丁町は、それから短冊形敷地へ移行したであろうし^{注27)}、そのほかでも場所によっては集住が遅れて発掘調査が示す時間差が生まれたのかもしれない。

しかし天正地割の翌天正19年に始まる戸籍調査と身分統制令は、農村から多くの商工層を切り離し、その多くが京都にも流れ込んだとされる^{注28)}。その新町人が新両側町を形成するとき、速成の上水供給施設を必要とした可能性は高い。そして裏地は水汲み経路やゴミ穴を掘る空地として扱った事を内田氏らの発掘調査は報告するが、全てそうであったとも考え難い。天下統一による治安の安定と流通経済の活性化を受けて資本蓄積を果たした富裕町人は、『聚楽第図』屏風の長者町にみるような本二階建て（図3）を建て、内部に専用井戸を確保、裏地に塗籠本瓦葺の庭蔵を置いたと思われる。

こうして16世紀末期の京都では（第3節）、各地で面的な裏地区画が完了し、短冊形敷地が生まれていて、面路部分に町家主屋、裏地に庭蔵という屋敷構成も出現していた可能性が高い。なお17世紀前半すなわち江戸時代初頭の勝興本『洛中洛外図』屏風でも、裏地の本瓦葺塗籠漆喰塗の建物が庭蔵である事を窺わせるが、周囲には植栽が描かれている（図6）。これらが庭であるとすれば、中世の富裕商人が街区内側に確保した裏庭よりも狭小にはなったと推測されるが、町家主屋の背面と庭蔵との間に庭園すなわち前栽（座敷庭）を置く配置構成の萌芽でもあったのではないだろうか。

第5節第3項 土蔵に関わる発掘調査の問題

内田氏らの発掘調査では、17世紀前半の裏地に土蔵痕が発見されていない。裏地に付属棟の痕跡が現れるのは17世紀後半だが、それでも13の裏地に1棟である。18世紀初頭の宝永大火（1708）後に

図6 勝興寺本（部分）

図7 寂光寺本（部分）

図8 今井町本（部分）

なってようやく座敷下に穴蔵痕が数多く検出され、さらに19世紀の天明大火（1788）以降に裏地の土蔵痕が列をなすとされる。そのため内田氏らは「石組穴蔵の標準装備化は、蓄財を開始できるほどに成長しつつあった町人が宝永大火の経験によって生み出した火災対策」であり、庭蔵は天明大火（1788）後に数多く発掘されるとして18世紀末期以降に普及したとされている^{注29)}。

しかし内田氏らは、前述のように竹間事例の背割溝を「公的な権力」が引いたとされる一方で、堆積物は江戸時代初頭として「天正期に豊臣政権下で実施されたという区画整理の時期とはズレが生じている」とされる。そうすると辺りの集住は、宣教師フロイスが「諸国から移動してくる人々の動きに伴って、建物、殿舎、居宅が数を増し、その変貌ぶりは以前にこの町をみた者でなければ信じられないほどであった」（『日本史』）と伝える天正地割後の京都改造に遅れた筈であり、そこは豊臣政権下で庭蔵を建てた富裕町人の町とは違う事情を、まだ資本蓄積を果たさない町人が集った可能性をみるべきである。その発掘結果を京都全体に普遍化する事には疑問がある。

それに絵画史料の庭蔵は、16世紀末期の『聚楽第図』屏風（図3）に初見した後も、高屋氏が僅少の突出内蔵を指摘された17世紀前半の勝興本『洛中洛外図』屏風にも、裏地の本瓦葺塗籠の漆喰塗建物として多くみえる（図6）。また17世紀末期の寂光院本『洛中洛外図』屏風（図7）は、内田氏らの発掘調査地域に近い御所南側に描

くが、二条城の大手筋にあたる二条通沿いの町家主屋は板葺が並び、その裏地に本瓦葺塗籠つまり庭蔵が多くある。文献史料でも、宝永大火(1708)の実録『音無川』^{注30)}に「焼残りし町々の辻々の番部屋、洛中洛外のかし座敷、下屋敷、二階三階蔵の内…火災の人々みちみちて」とあり、大火前に多くの土蔵建築の存在を示唆して、絵画史料にみる本瓦葺塗籠の漆喰塗建物が庭蔵である事を裏付けている。さらに大火後の正徳元年(1711)を描く^{注31)}今井町本『洛中洛外図』屏風でも、庭蔵らしい建物が、防火帯とみまごう後世ほどではないにしても立っている(図8)。内田氏らの報告はこれら史料を重視されないが、根拠とされる発掘調査は事例が少なく、表蔵に関わる面路部分も道路事情から発掘されていない^{注32)}。その中で、18世紀末期以前の庭蔵を過少に評価する見解には疑問がある事を指摘したい。

本論のまとめ

高屋真理子氏は中世に内包されていた内蔵が17世紀前半の元和期初頭に三階蔵として分離独立、その眺望機能が富裕表現となり、庭蔵を持つ近世京都の屋敷構成の定型化を促したとされた。これに対して本論は、庭蔵の出現経緯を検討した結果を以下にまとめる。

中世末期の戦乱を近世統一政権が平定して京都の治安は安定し、それまで襲撃に備えて内包されていた土蔵建築が表出する時代背景を得た。庭蔵の建築用地となる裏地は、街区内側の共同利用地における伝統的領主権・地子負担の消滅、天正地割による新両側町の増加と背割溝による町境明示、専用井戸・便所の確保や上水供給設備の設置、これら織豊政権の関与を受けた面路部分の町家が、同時並列的に隣地境界線を区切って占有を進めた。こうして現れた短冊形敷地の裏地に、資本蓄積を果たした町人が庭蔵を置き始めたのが16世紀末期であり、面路部分に町家主屋・裏地に庭蔵という屋敷構成も出現した。当時の庭蔵の位置取りには表通りに目立たせない中世的な考え方が窺えるが、同時期に出現した突出内蔵や、その後に増加した表蔵には富裕表現の性格があり、17世紀前半に町並景観の多層多様化の一翼を担った後に表蔵規制の対象になって消滅していく。

以上の事から、町人の富裕表現を動機に内蔵→三階蔵の分離独立→庭蔵の経緯を復原する高屋氏の見解には問題があり、庭蔵の出現時期は突出内蔵と変わらない近世初頭である事を本論は指摘する。

謝辞 本論は、京都工芸繊維大学大学院教授日向進氏をはじめ、信州大学工学部教授土本俊和氏、同講師早見洋平氏、八千代市文化財調査員高屋麻里子氏、京都市埋蔵文化財研究所内田好昭氏の研究成果を多く取り上げています。各位に深甚の敬意と謝意を表します。

注

- 注1) 「敷地奥に立つ土蔵は町境になるとともに、一種の防火帯として機能」伊藤毅 日本史リブレット『町屋と町並み』山川出版社 2007
- 注2) 丸山俊明「17世紀の京都の町並景観と規制 - 江戸時代の京都の町並景観の研究(その1) -」日本建築学会計画系論文集第581号 pp167-174 2004.3。本論は拙著『京都の町家と町なみ-何方を見申す様に作る事、堅仕間敷事-』第1章(昭和堂 2007)に加筆修正して掲載している。
- 注3) 高屋麻里子「洛中洛外図屏風に描かれた町家と土蔵の変遷」日本建築学会計画系論文集第607号 pp157-162 2006.9。同論考ではウダツも取り上げられており、上杉本〜林原本に見るウダツは「特別な富裕の印から、ごく一般的な町家の付属物」に変化して「構造としては形骸化」

したものとなる。しかしウダツに防風・防火性能を指摘する多くの先行研究や近年の土本俊和氏の成果(同『中近世都市形態史論』総論4「ウダツ」、或いはウダツの構造に浅瓦葺普及の減少理由を指摘した拙稿(「18〜19世紀の京都の町並景観における瓦葺規制 - 江戸時代の京都の町並景観の研究その2-」日本建築学会計画系論文集第587号 pp163-168、2005.1、拙著『京都の町家と町なみ-何方を見申す様に作る事、堅仕間敷事-』第2章に加筆修正掲載)へは言及されていない。

- 注4) 本論は絵画史料の景観年代を主に平安建都千二百年記念『都の形象 洛中・洛外の世界』(京都国立博物館 1994)の狩野博幸氏の見解に拠る。
- 注5) 伊藤鄭爾氏の言説引用(同『中世住居史』東京大学出版会 1991)
- 注6) 日向進『近世京都の町・町家・町家大工』思文閣出版 1998
- 注7) 丸山俊明「17世紀の京都の町並景観と規制 - 江戸時代の京都の町並景観の研究(その1) -」日本建築学会計画系論文集第581号
- 注8) 山本雅和「中世京都のクラについて」京都市埋蔵文化財研究所研究紀要 京都市埋蔵文化財研究所 2002.3
- 注9) 日向進『近世京都の町・町家・町家大工』
- 注10) 土本俊和『中近世都市形態史論』総論7 短冊形地割(中央公論美術出版 2003)を参照されたい。
- 注11) 土本俊和『中近世都市形態史論』総論3 ウラ
- 注12) 日向進『近世京都の町・町家・町家大工』
- 注13) 須藤優子・土本俊和「近世初期京都のウラ地とウラ構え」日本建築学会計画系論文集第528号 pp203-210 2000.2
- 注14) エツコ&ジョー・プライスコレクション所有。本論では2006-2007『若冲と江戸絵画』展カタログ作品解説64を参照した。
- 注15) 新修『大津市史』第九巻 南部地域 1986
- 注16) 田沢裕賀氏(東京国立博物館)が「土坡や樹木の描写から17世紀後半の政策とするのが自然だろうが…寛永期の風俗と共通する」と指摘されている(プライスコレクション『若冲と江戸絵画』展カタログ)
- 注17) 高橋康夫氏が17世紀中頃の『祇園祭礼図』に町家二階の町人不在とその後の低層・均質化を指摘されている(『京町家・千年のあゆみ 都にいきづく住まいの原型』学芸出版社 2001)。
- 注18) 『京都町触集成』第十巻 p57 岩波書店 1986
- 注19) 脇田晴子 中公新書 776『室町時代』中央公論社 1985
- 注20) 早見洋平・土本俊和「16世紀末京都・上京における隣地境界線の生成過程」都市計画 241号 2002、土本氏も『中近世都市形態史論』総論5「小屋と町屋」で「建物先行型」を詳細に説明されている。
- 注21) 土本俊和『中近世都市形態史論』総論1「中近世京都の全体像」、各論11「洛中地子赦免と町屋」中央公論美術出版 2003
- 注22) 平成10年度『京都市埋蔵文化財調査概要』(京都市埋蔵文化財研究所 2000)より第1章発掘調査3、内田好昭・高正龍・堀内寛昭「平安京左京一条四坊」。
- 注23) 西山良平・藤田勝也編『平安京のすまい』第5章内田好昭「中世後期から近世の町家」京都大学学術出版会 2007。同書第6章には土本俊和氏の批判も掲載されている(「京マチヤの原形ならびに形態生成」)。
- 注24) 西山良平・藤田勝也編『平安京のすまい』第6章土本俊和氏「京マチヤの原形ならびに形態生成」
- 注25) 土本俊和『中近世都市形態史論』総論8「水系と町割」
- 注26) 日本史リブレット 35 伊藤毅『町屋と町並み』より「町割の主要な部分は秀吉時代に施行された」「船場の町は…画街区中央の東西に敷設された背割水路が町境になっていた」
- 注27) 土本俊和『中近世都市形態史論』総論9「家屋敷」
- 注28) 脇田晴子 中公新書 776『室町時代』
- 注29) 内田好昭「近世の京都 - 公家町と町屋 -」第187回京都市考古資料館文化財講座配布資料 2007.2。なお同史料は「町屋」の「瓦屋根化」を宝永5-享保15年の間とするが、絵画史料にみる町並景観と整合しない(丸山俊明「18〜19世紀の京都の町並景観における瓦葺規制」)。
- 注30) 『新修京都叢書』第十一巻所収 臨川書店 1968
- 注31) 『大系朝鮮通信使善隣と友好の記録』第四巻 辛巳正徳度 明石書店 1993
- 注32) 第187回京都市考古資料館文化財講座における内田好昭氏の発言より。

(2007年3月7日原稿受理、2007年10月1日採用決定)